

「やさしい日本語」とは何か？

—外国人にわかりやすい表現について—

林 伸一

1. はじめに

日本の国際化が進み、日本の都市部だけでなく地方に住む外国人の数が増えてきている。

このような現状を踏まえ、埼玉県、愛知県、大阪府などは、外国人に「やさしい日本語」の取り組みを開始している。

そのうち埼玉県は、「国籍や文化に関係なく、人々が安心して、安全で快適な生活を送ることができる社会づくりをどうすべきか、外国籍県民にどのように行政情報を提供すべきか、外国人に配慮した行政情報のあり方はどうあるべきか」などを検討している。

「国籍や文化に関係なく」という表現は、「国籍や文化によって差別することなく」という意味合いで用いられているのであろうが、「外国人」という一括りの外国籍県民がいるかのような印象を受ける。文化差を持たない外国籍住民がいるわけではないから、「やさしい日本語」に関する検討をする際にも、外国籍住民の多様性についての配慮が必要であろう。

埼玉県は、その取り組みの一つとして、平成 11 年に「日本語を母語としない県民のための 広報を目的とする 行政情報の作成に関する 配慮指針」を策定している。さらに、この配慮指針を具体化するために「わかりやすい表現（やさしい日本語）」について「外国人にわかりやすい表現の手引」を平成 12 年に作成している。（埼玉県のホームページより）

その取り組みの意欲は大いに評価したいが、その説明文章の中に平成 11 年、平成 12 年などと年号が使われている点が、気にかかる。外国籍住民にとっては、日本の「大正」「昭和」「平成」などの年号に慣れ親しんでいる人もいるだろうが、一般的には西暦で示す方が理解しやすいと思われる。

2. 「平易な日本語表現」について

本稿では、埼玉県が作成した「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」の内容について具体的に検討したい。

そもそも、外国人にとってやさしい日本語とは、どのようなものであろうか。外国人が「わかりやすい」「やさしい」と思う日本語は、その人個人の日本語学習歴や準備状態（レディネス：readiness）、文化的背景、日本での生活経験などの違いによって異なる。

例えば、中国、台湾、韓国、シンガポール、ベトナムなど漢字圏出身の人には、漢字の意味は類推することができても発音が異なるためにルビ(ruby:振り仮名)を振るなどの配慮が必要であろう。日本語学習歴の短い場合には、入門・初級程度の文にする、ひらがなで書く、難しい言葉を使わないなど、「やさしさ」を確保するための配慮が必要となる。

漢字圏の出身者といっても、台湾では繁体字を使い、中国本土では簡体字を使っているために、日本の漢字の字体と違って判読できない場合もある。学校の「学」が台湾では「學」であり、日本語の「机」が中国本土では「機」の簡体字として使われている。

ちなみに日本語の「携帯電話」は中国語で「手机」となり、日本語の「スマホ（スマートフォン）」は、中国語で「智能手机」となる。日本語の「無料」が、中国語では「免費」となる。同じ漢字でも語に対する発想が異なり、表記が異なる場合がある。

中国出身の留学生には同じ漢字と言っても「平易」と「容易」では、「平易」は中国語の文脈では用いられないために、意味がとりにくく、「容易」であれば、「やさしい（易しい）」という意味として理解できる。

そもそも和語の「やさしい」は、漢字で書けば「優しい」と「易しい」に書き分けられ、意味も「優しい」(gentle/graceful/kind/tender)と「易しい」(easy/simple/plain)とでは異なる。平仮名を習得した外国人には、「やさしい」と書けば、発音は「易しい」かもしれないが、意味は「易しい」とは限らず「優しい」の場合もある。「やさしい」を漢字で「優しい」と「易しい」に書き分けるのは、意味の「見える化」に貢献することになるというメリットもある。

林(2014)は、「漢字文化圏の人々にとっては、表記をカタカナから漢字にするだけでも意味内容の可視化『見える化』につながる」としている。ただし、非漢字圏の人が日本語を書く場合には「やさしい」⇒「易しい」⇒「優しい」の順に画数も増え、難易度が増すこととなる。

外国人日本語学習者にとって漢字表記が難しいのは、書くのに煩雑だというだけでなく、読む場合にも「音読み」と「訓読み」があり、「音読み」の中にも「呉音」「漢音」「唐音」「宋音」などの読み方の違いがあることが煩わしいのであろう。さらに「重箱読み」「湯桶読み」などもある。

例えば、浅草（あさくさ）には、浅草寺（せんそうじ）があり、雷門（かみなりもん）の両側には、風神（ふうじん）と雷神（らいじん）が配置されている。

外国人にとって、地名の浅草（あさくさ）は訓読みなのに、そこにある浅草寺（せんそうじ）は、なぜ音読みなのかという疑問が起こる。地名は訓読みで、建造物は音読みかというところではなく、雷門（かみなりもん）という建造物は訓読みであり、その辺りの地名としても、「東京都台東区雷門1丁目」のように訓読みの雷門（かみなりもん）が使われている。さらに雷門（かみなりもん）の両側には、「かぜがみ」ではなく、風神（ふうじん）と「かみなりがみ」ではなく雷神（らいじん）の像が配置されている。漢字を学習した外国人も「いったいどうなっているんだ？いい加減にしろ！」と叫びたくなるのではないだろうか。

「やさしい日本語」には、「これが正解」という一律のガイドラインは策定しがたい。日本語母語話者がどんな人たちに何を伝えたいかを具体的にイメージしながら、こんな表現、あんな言い方、と自分たちでいろいろと工夫して創ることが大切になる。

近年、外国人に対して、やさしい日本語についての研究実践が、各地で行われるようになってきた。特に庵ら(2013)の研究は、日本語教育関係者に大きな影響を与えている。

3. 行政情報の提供をする際の「やさしい日本語」

埼玉県では、行政職員の方々に自分たちが関わっている仕事の中で、外国籍住民に関係する行政情報の提供をする際に、「やさしい日本語で伝えるという方法がある」ことを考えていただきたいとして、次のような例を示している。

- ① 「召し上がる」といった敬語の使用を控え、「食べる」といった語に置き換える。
- ② 「土足厳禁」のような漢語を「くつをぬいでください」といった和語に置き換える。
「高台に避難する」のような表現を「高いところへ逃げる」と言い換える。
- ③ 「キャンセルする」のようなカタカナ語を「やめる」といった和語に置き換える。

① 「召し上がる」といった敬語の使用を控え、「食べる」といった語に置き換える。

敬語の使用を控えるのは、容易だと思われるかもしれないが、日本語における敬語使用は、単に目上の人を敬う場合に用いるだけでなく、「ウチ」と「ソト」の親疎関係から、「ソト」の人に「食べる」ではなく「召し上がる」を用いるという場合が多い。つまり、明らかに年下の外国人にも無意識に「ソト」意識が働いて、つい敬語が出てしまう傾向がある。

それと動詞表現のみを敬語と考えがちであるが、「お名前は?」「ご住所は?」のような名詞レベルでも「ウチ」と「ソト」の親疎関係を区別するのが一般的である。窓口業務の職員は、いわば反射的に「お名前は?」「ご住所は?」のように、外国人に問いかけてしまうだろう。

② 「土足厳禁」のような漢語を「くつをぬいでください」といった和語に置き換える。



「土足厳禁」を「くつをぬいでください」と置き換えることは、日本語母語話者の小さい子供にもわかりやすい。

「土足厳禁」の「土足」の部分を見ても、「泥で汚れたままの足」または「履物をはいたままの足」を連想することは漢字圏の学生にも難しいようである。四文字熟語は、中国由来のものが多いため、漢字四文字の「土足厳禁」を見たら中国人学生には分かりやすいと思いがちであるが、そうではない。「立入禁止」と勘違いすることもある。若者の短縮語としては、「土足厳禁」の途中を省略して「ドキン(土禁)」と言うようだが、さらに分かりにくい。ちなみに伝統的な日本家屋の「土間」も、中国人には理解しにくいようである。

「高台に避難する」を単に「高いところへ逃げる」と言い換えたのでは、問題となる場合がある。「高台」の意味するところは、「小高い丘」か「山の斜面」であろうが、単に「高いところ」では、今いる建物の二階か三階くらいのイメージしか思い浮かべない人もいようであろう。東北大震災の際には、建物の二階か三階に避難したのに、津波にのまれて犠牲になった方も多数いた。埼玉県が作成した「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」は、東北大震災の以前に作成されたものだが、現時点での見直しも必要であろう。

③ 「キャンセルする」のようなカタカナ語を「やめる」といった和語に置き換える。

この例は、下位語を上位語で置き換えるようなもので、例えば「旅行をキャンセルする」は「旅行をやめる」で通じる。ただし、「ホテルをやめる」は「ホテルの予約を取り消す」場合だけでなく、「ホテルの経営をやめる」場合と「ホテルを退職する」場合があり、誤解し、混乱する恐れがある。「やめる」といった和語の守備範囲は広く、「キャンセルする」のようなカタカナ語は、「契約・約束・予約などを取り消す」ことで守備範囲が狭い。「キャンセルする」を和語に置き換えるなら「取り消す」の方が妥当であろう。日本語を学習していない中国人にも「予約を取り消す」の漢字の部分を読み取れば、「キャンセルする」の意だと類推できる。

カタカナ語は、主に非漢字圏の国から入ってきた借用語であるが、一部、「和製英語」もあり、そのことに気づいていない日本語母語話者もいるので、気を付けるようにしたい。例えば「詳しいことはホームページを見てください」などと言う時の「ホームページ」は和製英語で、英語では web site または web page という。



埼玉県の手引きでは、「コーヒー」「マンション」「ボールペン」の3例を挙げている。日本語の「コーヒー」は、「原語とは発音が全く違う」とされている。原義は、アラビア語の「飲み物」だったようで、13世紀頃からアラビアを中心に主としてイスラム教の国々で愛用されたとのことである。17世紀にヨーロッパに伝わり、日本には18世紀後半に伝来したとされる。だから、英語の<coffee>が原語とは限らず、オランダ語では、<koffie>であり、フランス語では<café>であり、f音が苦手な日本人の「コーヒー」の音は[ko:çi:]で、二つの母音とも長音化して4拍語となる。f音が苦手なのは、日本人だけでなく、シンガポールでもパプアニューギニアでも[kopi:]とp音で代用される。ちなみにシンガポールでは、ブラック・コーヒーが砂糖もミルクも入れないことから[kopi:o:]となる。つまり[o:]はゼロ記号の意となる。

英語の<coffee>は、発音は[kófi/káfi]で最初の母音に強勢のアクセントが置かれるため、第二の母音に比べてどうしても長めに発音される傾向にあるが、長音化してもしなくてもよい2音節語となる。

もともと英語の<mansion>は、豪華な大邸宅の意で、日本語の集合住宅としての「マンション」は、<apartment>や米国では<condominium>、英国では<flat>に当たる。名ばかり店長ではないが、名ばかり「マンション」で実質は「アパート」という集合住宅が日本には多い。

英国では、<Mansions (複数扱い)>で、高級アパートの固有名詞の一部としてのみ用いられる場合がある。例えば、『オーレックス英和辞典』には<12 Victoria Mansion(ビクトリアマンション12号)>のような用法が載せられている。

「ボールペン」は、英語で<a ballpoint pen>となり、「原語では行われぬ省略した言い方」とされる。外来語（借用語）さえも途中省略してしまう「省略する言語文化」の例である。（林2014参照）

ただし、「コーヒー」「マンション」「ボールペン」などは、すでに外来語として定着していて、日本語の中に溶け込んでおり、いまさら別の語に置き換えられないであろう。

愛知県、大阪府などでも「外国人にやさしい日本語表現の手引き」に相当するものを作成していて、漢語やカタカナ語を「和語に置き換える」例を示している。漢語は意味に透明である

のに対して、カタカナ語やひらがなの和語は意味に不透明である点も考慮する必要がある。

専門用語を日常的な言葉に言い換える努力は、外国人が理解しやすくなるために必要であるが、多くの専門用語が漢語かカタカナ語であることが多い。

近年、漢語の「可視化」を和語的な「見える化」と言い換えるような動きはあり、「見える化」の方が分かりやすいのだが、専門用語とはなりえていない。

和語は、日本固有の言葉で、漢字の訓読みをするものであり、「会う」「上がる」「終わる」などがあるが、漢語に比べて多義的で意味が特定されにくい場合も多い。

例えば「上がる」は、「二階から三階に上がる（＝移動する）」場合にも、「仕事が上がる（＝終わる）」場合にも、「バッテリーが上がる（＝無くなる）」場合にも用いられる。日本語母語話者にとっては、多義的で便利な和語表現も、外国人にとってはどの意味で用いられているか判断に迷う場合もある。

生活場面で必要とされる生活言語能力（BICS＝Basic Interpersonal Communicative Skills）が和語で構成されることが多く、学校教育などで学ぶ認知処理に必要な学習言語能力（CALP＝Cognitive Academic Language Proficiency）は、漢語と外来語で構成されることが多い。

日本語母語話者にとっては、日常生活言語に和語が多いことから、和語に置き換えると「やさしい」と感じるが、非日本語母語話者にとっては必ずしも、和語に置き換えることでやさしくなるとは限らない。特に漢字圏の人にとっては、「高速道路」はそのまま通じることもある。韓国語でも発音が近似しており、中国語の表記では、「高速公路」となる。

「やさしい日本語」は、災害などの緊急時にいろいろな国の言葉に翻訳したり、通訳ができる人を探したりする時間的余裕がないために、早く情報伝達ができるというメリットがある。

また、日常生活でもコミュニケーションを円滑に進める上で役に立つと期待されている。

4. 日本語教育学会の『日本語教育』の特集「やさしい日本語」の諸相について

日本語教育学会は、学会誌『日本語教育』の158号で、「やさしい日本語」の諸相について特集している。その巻頭論文は、野田(2014)の『『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へー母語話者が日本語を使うときの問題としてー』である。

前項の埼玉県「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」の中の「キャンセルする」のようなカタカナ語を「やめる」といった和語に置き換えるといった提案にも拘わらず、「キャンセル」「メールアドレス」「フォーマット」「リンク」「コース料理」などのカタカナ語が使われている。

具体例として、野田(2014)は「商店で贈り物用の包装をするかどうか聞くときに、『ご進物』や『ご自宅用』を使うのはわかりにくく、『プレゼント』を使うのはわかりやすい」としている。

さらに野田(2014)の15ページの論文には、タイトルと英文要旨を含めて30回の「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」という表現が使われている。

「やさしい日本語」に対抗して「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」という概念をキーワードとして用いているために、やむを得ないのかもしれないが、「ユニバーサル」という言葉は、本当に universal で外国人にわかりやすい言葉なのであろうか。英語を学んでいない中国人には「ユニバーサル」という言葉を聞いただけでは理解できないそうである。中国は、外国語をストレートには受容しないお国柄ではあるが、日本人でも「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」くらいしか思い浮かばない人も多いのではないだろうか。



ちなみに「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」は、中国語で「日本環球影城」となり、英語を習った若い人はUSJでも分かるようである。

携帯の『モバイル辞典』(旺文社監修)の中の「国語辞典」(約5万2千項目)には「ユニバーサル」という見出し語は登録されていない。同じく『モバイル辞典』の中の「英和辞典」には、universalで7項目の語義が示されており、多義語である。「コミュニケーション」の方は、外来語としてすでに日本語の中に定着しており「国語辞典」にも登録されている。

「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」とは、「一般的な日本語コミュニケーション」なのか「普遍的な日本語コミュニケーション」なのか、「全世界的な日本語コミュニケーション」なのであろうか、それとも「宇宙的な日本語コミュニケーション」なのであろうか。

特集を組んだワーキンググループは「野田氏はこの論文の執筆にあたって『やさしい日本語』で書くことを心がけてくださったようで、読み手に大変わかりやすく、『やさしい日本語』を論じつつ実践されていることが伝わってきます」と述べているが、少々首を傾げたくなる。と言うのは、30回の「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」という表現が使われているが、その定義は、10回目にやっと「どんな人にとっても使いやすい『ユニバーサルデザイン』に基づく日本語コミュニケーション」と示されている。「万人のための日本語コミュニケーション」くらいの意味であろうが、「ユニバーサルデザイン」の定義が示されていないので、やはり釈然としない。わかりやすさを心がけるのであれば、できるだけ冒頭に用語の定義を示すのが、論文作成上の国際的な礼儀(マナー)である。定義を示さないまま論をすすめるのは、日本の「省略する言語文化」の悪しき慣習と言わざるを得ない。

「ユニバーサルデザイン」は、国籍や性別、年齢、障害があるかないかなどに関係なく、初めから、すべての人ができるだけ使いやすく、便利なものを広めるために用いる言葉である。

野田(2014)は、「どんな『日本語弱者』も、手話や音訳、点字などを含め、自分が一番楽に使える『母語』やそれに準じる言語でコミュニケーションができる多言語化された社会が理想である」として「言語についてバリアフリーな社会」を提唱している。その理想には、賛同するし、共感できるが、すでに日本語は自然言語として現実に運用されているため「国籍や性別、年齢、障害があるかないかなどに関係なく、初めから、すべての人ができるだけ使いやすく、便利なもの」に作り変えるわけにはいかない。自然言語を簡便にしようとした「簡約日本語」の失敗例もある。

一方「バリアフリー(barrier-free)」の方は、お年寄りや障害のある方といった特定の人を対象として、快適に生活できるように、家の改築など後からバリア(barrier:障壁)をなくすこともでき、家の新築の時も初めからバリアのない設計にしておくこともできる。野田(2014)の主張は、「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」というより、「バリアフリーな日本語コミュニケーション」と言った方が適切なのではないかと思われる。

「ユニバーサルデザイン」は、国籍や性別、年齢、障害があるかないかなどに関係なく、初め

から、すべての人ができるだけ使いやすく、便利なものを設定するが、非漢字文化圏の人と漢字文化圏の人の間には、文字表記についての「読み・書き」に大きなバリアがある。

一般的には、バリアフリーを一步進めた考え方が、ユニバーサルデザインだと言われているところから、野田(2014)の「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」という考え方が出てきたのであろう。しかし、現実対応として実効性が期待できるのは、むしろ「バリアフリーな日本語コミュニケーション」の方だと思われる。

野田(2014)の「日本語教育では、文法(文型)に比べ、語彙は軽視されることが多い」として、「やさしい日本語」にとって語彙は文法より重要であると主張している。

それを裏付けるのが、岩田(2014)の「看護師国家試験と『やさしい日本語』」である。

岩田(2014)によれば、「一試験に1回以上出現する可能性がある2級文法はせいぜい15程度であり、2級文法170項目の一部にすぎない。名詞語彙に関しては、65%が級外または1級語彙であり、2級語彙では全く対応できない」とのことである。

5. 日本語テキスト「易しい内容から難しい内容へ」

埼玉県が作成した「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」には、外国籍県民に日本語で県の行政情報を伝えるための「やさしい日本語の作り方」の指針が示されている。

日本語が初級レベルの人を対象として、文の構造に関して次の4点を示している。

①と②の項目について、以下に検討を加えたい。

- ① 単文、短文 ② 主語、目的語、述語を明確に ③ キーワードははじめに
④ 箇条書きのすすめ

① 単文、短文

外国人のための日本語テキストもほとんどが「易しい内容から難しい内容へ」と段階的に課が配列されている。確かに最初は単文から始め、課が進むと重文や複文を理解し、使えるように練習する。文の長さも短文から長文へと発展していく。

② 主語、目的語、述語を明確に

「主語、目的語、述語を明確に書く」という点は、自然な日本語の特徴として主語なし文(略題文、無主格文、一語文)が多く出現するため、難しい面がある。山口県のローカル日本語テキスト『おいでませ山口1』の第1課の自己紹介文には、次の下線で示したような略題文(主題を省略した文、三上1970参照)が続出する。

「はじめまして、ワンです。中国から 来ました。どうぞ よろしく。」

「妻のリーです。どうぞ よろしく おねがいします。」

「山本です。こちらこそ、どうぞ よろしく」

上記の4文にそれぞれ「私は」という主題をつけて言うと不自然になる。

「はじめまして」「よろしく」「こちらこそ」などは、一塊のあいさつ表現として一語文扱いになるし、人にもものを勧めるときなどの「どうぞ」も一語文として多義的に機能する。

日本語では形容詞「あぶない！」だけで一語文が成立するが、英語では、Look out! Watch out! Take care! Be careful! など、動詞を中心とする二語文または一語的表現 (one-member sentence) となる。言語と文化による発想の違いがある。

やさしい日本語に書き換えるときの留意点として、次の8項目が挙げられている。

- ① 「です」、「ます」形を使う。
- ② 日常よく使われる語彙を使う。
- ③ わかりにくい言葉は、説明や言い換えを付け加える。
- ④ カタカナ外来語は、なるべく避ける。
- ⑤ 二重否定は使わない。
- ⑥ 文末表現は単純にする。
- ⑦ あいまいな表現は避ける。
- ⑧ 尊敬語、丁寧語は使わない。

以上の8項目に関して検討してみたい。

① 「です」、「ます」形を使う。

外国人のための日本語テキストもほとんどが「です」、「ます」形を使う表現からスタートしている。山口県の『おいでませ山口1～5』のシリーズでは、付録的な「方言解説ページ」などを除いて、2番目のテキスト『おいでませ山口2』の第9課に「です」、「ます」形を使わない普通形の会話文が初めて提出されている。『おいでませ山口4』の第4課では、学習者のパクさんが田中先生に対して「です」、「ます」形（丁寧形）で話し、田中先生はパクさんに普通形で応じるという会話場面が設定されている。目下から目上には、丁寧形で話しかけ、目上から目下には、普通形で応じることが許容されるという暗黙の了解が日本人の間では成立するが、その点が外国人には難しい。親子関係は別として、目上から目下に普通形で問いかけて、その応答が普通形だと目上の側は、「タメロで応答された」「馴れ馴れしい口のきき方だ」「近頃の若いものは敬語が使えない」などとマイナスの反応を示すことが多い。

災害等の緊急避難を要する時に「危ない」「逃げろ」「急げ」などつつさの発話は、どうしても短い普通形になり、「危ないです」「逃げてください」「急いでください」など丁寧形で話しかける心のゆとりがないのではないかと思われる。緊急放送や消防士の呼びかけなどは、パニックを起こさないためにもゆっくり落ち着いて丁寧形で発話したほうがいいし、そのように訓練されているであろうが、一般人の場合、なかなかそうはいかない。

『おいでませ山口4』の第8課にも、アルバイト学生と店長の会話で、アルバイト学生が丁寧形で話しかけ、店長が普通形で応じるモデル会話が提出されている。店長の「これからは気をつけろよ」という発話を「これからは気をつけてください」としたのは、上下関係の言葉づかいが不自然になる場合もある。難しいのは、同じ人間同士でも時間の経過により、丁寧形から普通形に移行したり、またその逆もあるということである。その逆というのは、親密なカップルが疎遠になるような場合、夫婦が離婚しそうな場合などである。

② 日常よく使われる語彙を使う。

「日常よく使われる語彙」は、生活言語 (BICS) に属するが、地震や原発事故などの災害の時

には、普段ほとんど使わない「想定外」「緊急避難」「広域災害」などの用語が飛び交うこととなる。特に原発事故などでは、「メルトダウン」「放射線量」「除染」などの専門用語が多く出てくる。原子力発電のしくみを「日常よく使われる語彙」で説明するのは至難の技である。原子力発電に関係する語彙や表現は、専門的な学習言語能力（CALP）に属すもので、異なる言語世界にあると言っていいほど、生活言語能力（BICS）との間に距離がある。

平穏な日常生活の言語生活から、突如として非日常の災害時の避難や避難生活を強いられる際に、どれだけ「日常よく使われる語彙を使う」ことができるだろうか。ほとんどの人が言葉を失ってしまうような中で「日常よく使われる語彙を使う」ことの矛盾に直面せざるを得ない。

「日常よく使われる語彙」は、わかりやすいかという点もそうとも限らない場合がある。例えば、「お守り」と書いて、「交通安全のお守り」など身につけていると危険や災難を逃れられると信じている「おまもり」と子どもの相手をしたり、世話をしたりする「おもり」の両方の読み方がある。まったく同じ表記でありながら、辞書でも別項目として扱っている。日本人は前後の文脈から、瞬時にどちらかを判断して、読み分けているのである。高コンテキスト文化の住人だからこそ成せる技である。（林 2007、林 2014 参照）

同音意義語に関しては、その用法の誤り等が議論されることが多いが、同表記異発音の語はあまり論じられてこなかった。

「市場」と書いて「いちば」と読むか「しじょう」と読むかでイメージが変わるだけでなく、指示物も変わる場合がある。訓読みの方は「魚市場（うおいちば）」「青物市場（あおものいちば）」「公設市場（こうせついちば）」など日常使われる語彙の中に入る。しかし、音読みの「しじょう」となると「中央卸売市場（ちゅうおうおろしうりしじょう）」「国内市場（こくないしじょう）」「労働市場（ろうどうしじょう）」「金融市場（きんゆうしじょう）」「市場調査（しじょうちょうさ）」など専門的で抽象度が高くなる。

訓読みの「いちば」の方は、生活言語能力（BICS）の守備範囲として和語で構成される例に当たる。一方、音読みの「しじょう」の方は、学校教育などで学ぶ認知処理に必要な学習言語能力（CALP）の守備範囲として漢語で構成される例に当たる。日本語母語話者にとっても、日常生活言語としての「いちば」は実際に目に見える具体物として理解しやすく「やさしい」と感じるが、日本語母語話者にとっても、非日本語母語話者にとっても、音読みの「しじょう」の方は、経済学用語として専門的な範囲に入ってしまう、内容的に難しいと感じるであろう。

同じように「音」と書いて「おと」と読めば、生活言語であるが、「おん」と音読みするとたちまち音声学用語となって専門化し、学習言語になってしまう。

③ わかりにくい言葉は、説明や言い換えを付け加える。

論文や新聞・雑誌などでも、わかりにくい言葉には、説明や注がつけられていたり、言い換えが示されたりしている。問題は、外国人にとって何が「わかりにくい言葉」であるかという点である。

例えば、「言葉のキャッチボール」という表現は、「言葉のやり取り」⇒「会話」というような意味合いで用いられると思うが、野球が盛んでない国の人にとっては意味不明であるかもしれない。野球が 2012 年ロンドンオリンピックの正式種目から外されたのは、世界的に見て競技人口が少ないため、盛んなのは、米国、キューバ、日本、韓国、台湾、オーストラリアぐらいの地域

に限られている。世界的に見れば、野球のボールに触ったこともない人が、大多数を占めるということになる。野球のボールに触ったこともない人にとって、「言葉のキャッチボール」という表現は実感を伴わないし、比喩表現だとわかっていてもプラス・イメージなのか、マイナス・イメージなのかも定かではないだろう。

しかも、キャッチボール自体は、和製英語で、英語では単に<catch>というだけである。英語の文脈では、<catch-ball>というと「バレーボールで、ボールがプレーヤーの手や腕に静止する反則」のこと、つまりホールディングの意味になってしまう。反則行為であるから、マイナス・イメージの言葉であるが、日本語の文脈では「言葉のキャッチボール」という表現だけでなく、「心のキャッチボール」（心とところをかよい合わせること）のような無条件にプラス・イメージの表現として使われている。

④ カタカナ外来語は、なるべく避ける。

前項のようなことがあるため「カタカナ外来語は、なるべく避ける」ということになるのだが、身近なカタカナ外来語の「トンネル」を日本語で言ったらどうなるであろうか？

「トンネル」に対応する日本語は、「隧道」であるが、「トンネル」は知っていても、「隧道」という言葉を知らない日本人の方が多いのではないだろうか。トンネルの入口に「〇〇隧道」と名前があっても注意していないと目に入らないものである。



「ティッシュ」を日本語で言ったらどうなるであろうか。なかなか思いつかないので、辞書を引いてみると「薄葉紙」「高級ちり紙」と出てくる。「薄葉紙」とは、60年余りの人生で初めてご対面した語である。「薄葉紙って何ですか？」という問いに何人が「ティッシュ」と答えられるであろうか。

「ちり紙」の方は、日本人の年配の人には、昔そう言えば使ったことがあるな、と思い出せるかもしれないが、若い人達は、トイレット・ペーパーかティッシュの世代であり、「ちり紙」を使用した体験がない人が多いと思われる。「ちり紙」使用は、近過去のことであり、「ティッシュ」

世代に体験的理解を求めるのは困難である。

そもそもカタカナ外来語は、それまでの日本になかった物や日本語になかった概念が外から入って来た場合に使われたという経緯がある。コンピューターを「電子計算機」といった時代もあったが、コンピューターは「計算機」としての演算機能だけでなく、文章作成機能や編集機能、通信機能、記憶機能など数え上げれば、きりがなほほど様々な働きをこなす機械となっており、コンピューター以外に言い換えがきかなくなっている。

カタカナ外来語が増えることにより、日本語が乱れるとの心配がある。山口県の『おいでませ山口1～5』のシリーズでは、新出外来語(名詞)の割合が各巻によって異なるが、11.3%～18.6%の間に留まっている。混種語や固有名詞の中に含まれている外来語を加えても1～2割程度である。

⑤ 二重否定は使わない。

「行かないわけではない」「辞退したいわけではない」など否定の言葉を二度重ねて、肯定の意味を強めたり、その肯定を婉曲に表したりするのが二重否定である。「行かないわけではない」は「行く」、「辞退したいわけではない」は「辞退しない」とすれば、単純明快で誤解の余地がない。

では、なぜ日本人は「行かないわけではない」「辞退したいわけではない」などと回りくどく、優柔不断ともとれる発言をするのであろうか。それは、「場の空気を読む」日本人の「場の倫理」が働いているように思われる。(林 2007 参照)

「行かないわけではない」は、「行かない」と主体的に決めたわけではなく、その場の空気を読んで「行かない」こともありうることを言外に表している。同じように「辞退したいわけではない」も本人が主体的自主的に「辞退したい」と申し出るのではなく、見えざる「場の空気を読む」ことによって、あるいは「無言の圧力を感じて」結果的には「辞退する」こともありうることを暗示している。「個の倫理」よりも「場の倫理」が優先し、「場の空気を読む」ことに一所懸命なのである。(林、2007参照)

こういった日本人の「高コンテキスト文化」は、徐々に明確に言わなければわからない「低コンテキスト文化」へと移行しつつあるが、なかなかモダリティ(心的態度)やメンタリティー(心的傾向)は容易には変えられない。「二重否定は使わない」と決めたとしても、時と場合によっては、無意識に「二重否定を使わないわけにはいかない」事態に陥るであろう。自然言語は、意図的計画的に変革できないことは、野元菊雄氏の提唱した「簡約日本語」の試みが失敗したことを見ても明らかである。(林 1988 参照)

⑥ 文末表現は単純にする。

日本語のモダリティ(心的態度)やメンタリティー(心的傾向)は、文末表現に多く出現するために、「文末表現を単純にする」と言っても、容易には実行できないであろうと思われる。まさに、この「実行できないであろうと思われる」という表現も「実行できない」と断定して言い切ってもいいのだが、「であろう」「だろう」など断定し難い筆者の心的態度(モダリティ)が出てしまう。さらに「と思われる」までが付け加わってしまう。まさにこの「～てしまう」も筆者の不甲斐ない気持ちや残念な気持ちを表すモダリティ表現である。文末が肯定か否定かといった単純なものであれば、気が楽なのだが、日本語の文末のモダリティ表現には「確言、概言、説明、願望、意思・勧誘、依頼、当為、命令、禁止、許可」などがあり、さらに文中のモダリティ副詞(きっと、

必ず、うっかり、やっとなど)によって文末の表現も影響を受けることがある。

モダリティ(心的態度)やメンタリティー(心的傾向)といったカタカナ外来語は、なるべく避けるという原則を立てたととしても、自然言語を説明する上位のメタ言語には、カタカナ外来語の使用は避けられない。

⑦ あいまいな表現は避ける。

前述の⑤二重否定は使わない、⑥文末表現は単純にするなども、⑦の「あいまいな表現は避ける」ためである。さらに、「言いさし文」も外国人にとっては「あいまいな表現」になる。例えば、「カラオケに行きませんか」という誘いに「行きたいんですが、ちょっと…」とか「カラオケは、ちょっと…」などと応答する日本人が多い。「ちょっとの時間なら行く」の意味なのか「行きたくない」のか、あるいは「カラオケは苦手だから、行きたくない」のか、あいまいでわからないと悩む外国人が多い。



「言いさし文」を避けて、「行きたいんですが、ちょっと時間ありません」とか「ほかに用事があるので行けません」とか、文末まではっきり言い切って断ってほしいと外国人は思うようだ。

ところが日本人は、「省略する言語文化」の中で生活しているので、前件(前半)だけ言えば、後件(後半)は相手が類推してくれるものと思う。「明示する言語文化」の中で育ってきた外国人は、最後まではっきり言ってくれなければわからないと考える。(林 2014 参照)

「たり」には、副助詞的に用いて、同種の事柄の中から、ある動作・状態を例示して、他の場合を類推させる場合もある。

『デジタル大辞泉』には「車にひかれたりしたらたいへんだ」という用例が示されている。

この用例は、略題文であり無主格文であり、どんな場面で、誰が誰のことを心配しているのか示されていない。主格や場面を類推させ、言外に暗示する表現方法である。日本人であれば「車にひかれたりしたらたいへんだ」とは、親(大人)が子どもを心配している場面、あるいは老人の徘徊を心配している場面であろうと推測することができる。「子どもが車にひかれたり、迷子になったり、誘拐されたりしたらたいへんだ」のように、他の場合を類推することもできる。このように日本語が、あえて他の場合の列挙・例示を省略して、類推させ、暗示するところが「省略する言語文化」と言われる所以であろう。(林 2014 参照)

外国人留学生に同例文を示して、どのような場面かを類推させたところ、「大切な物が車にひかれたりしたらたいへんだ」「赤信号なのに横断歩道を渡っている友達が車にひかれたりしたらたいへんだ」などと心配する内容であった。日本人学生は、ペットを心配する場面を思い浮かべた。

『おいでませ山口3』の第3課には、「よくバスに乗りますか」という問いに対する応答として、「バスは高いし、不便だし…」という言いさし文を提示している。前件の理由のみを示し、後件は省略して相手に類推させる表現である。これも「省略する言語文化」の特徴的な表現方式と言えるだろう。

⑧ 尊敬語、丁寧語は使わない。

目上、目下などの身分格差をなくすために敬語廃止論が議論されたことがある。坂口(1948)は

「敬語論」として次のように述べている。外国人との関係以前の問題があると言えるだろう。

「敬語にあらわされる階級観念は民主主義時代にふさわしからぬと申しても、旧態依然たる生活様式があり観念があるからには仕方がない。言葉だけ変えてみたって、実質的には何らの意味もなさない。生活の実質的なものが、おのずから言葉を選び育てるのであるから、問題はその実質の方である。」

検討課題の具体例をあげておくと、山口県広報誌『ふれあいやまぐち』や『市報やまぐち』には、「ご覧ください」「ご注目ください」「お問い合わせください」「ご提案をお寄せください」「ご相談ください」「ご来館ください」「お越してください」「ご参加ください」「ご協力ください」などの呼びかけの文末表現が使用されている。「ご+漢語+ください」と「お+和語+ください」の区別も外国人にとっては、難しい。「ご来館ください」と「お越してください」は単純化し、「来てください」として、「ご覧ください」は「見てください」、「ご提案をお寄せください」は「提案してください」などと簡素化してみてもはどうであろうか。

6. リライト教材の可能性

光元(2014)は、日本語指導が必要な児童生徒を対象に取り出し授業と在籍学級の授業を結ぶ「教科書と共に使えるリライト教材」を提案し、実践している。「リライト教材」の活用が、「子ども」に在籍学級での対等な「参加」を促し、自らの学びを自らの言葉で「語り直す」という質の高い学びをもたらしたと報告している。

児童生徒に限らず、成人の日本語学習者にとっても「やさしい日本語」によるリライト教材の可能性と有効性を検討してみる価値があるように思われる。

山口県のローカル日本語テキスト『おいでませ山口 5』には、課によって異なるが「ステップアップ」や「コラム」「文化紹介」などのコーナーを設けている。そのうち「ステップアップ」では、第2課「竹取物語」第4課「シンデレラ」第6課「蜘蛛の糸」第9課「たなばた」などの作品をリライト教材として提示している。

第2課の「竹取物語」は、見開き2ページに物語をまとめて示し、「()」の中の言葉を使役形に変えましょう」といった課題を付けている。さらに「おじいさんは、かぐや姫をどこで見つけましたか」といった内容質問が四つ用意されている。内容理解を助けるための挿絵も4点挿入されており、新出語には英語訳などが付けられている。

第4課の「シンデレラ」は、2ページに物語をまとめて示し、「()」の中の言葉を変形させたり、内容理解を助けるための挿絵が挿入されたり、新出語には英語訳などが付けられたりしている。また「動物が出てくる話」「主人公がいじめられる話」「遠い国に冒険に行く話」などがあったら紹介してくださいといった課題が示されている。これは、自分の知っている物語を自分が学んだ日本語で語るといった試みである。

第6課の「蜘蛛の糸」は、芥川龍之介の作品をリライトすることなく、冒頭部分をそのまま掲載している。原文は縦書きであるが、『おいでませ山口 5』には、横書きで漢字には上ルビが付けられている。「この作品にはお釈迦様に敬意を表した表現や丁寧な表現がたくさんあるので注意しながら読んでみましょう」との呼びかけはあるが、特に課題や設問が付けられているわけではない。音読または朗読の材料として適材であり、『おいでませ山口 5』の眼目が、尊敬語・謙譲語などの待遇表現を学ぶことにあり、「蜘蛛の糸」が選ばれたのであろう。ちなみに山口県下松市で行

われた朗読コンテストに中国人留学生が出場し、「蜘蛛の糸」を朗読して賞を得ている。

第9課の「たなばた」は、織姫と彦星の話で「毎年7月7日になると、二人は天の川を渡っていき、1年に1度のデートをするのでした」と現代風に締めくくっている。1ページだけの提示で、「みなさんの国にも『たなばた』と似ている話がありますか。また、そのほかにも星が出てくる話がありますか。クラスの友だちに紹介してみましよう」と課題を投げかけている。

7. 「見える化」によるわかりやすさの確保・拡大

野田(2014)は、さまざまな非母語話者にとってわかりやすい日本語にするためには、狭い意味では言語的とは言えない次のような情報伝達の面を十分に考える必要があるとしている。

- 7-1. 伝達手段：身ぶり、現物提示、記号・図表・イラスト・写真・動画の使用など
- 7-2. 伝達様式：情報を伝える順序、文章のレイアウトなど
- 7-3. 伝達内容：伝える情報の取捨選択 (番号は筆者による)

上記の三点について以下に検討を加えたい。

7-1. 伝達手段：身ぶり、現物提示、記号・図表・イラスト・写真・動画の使用など

直接教授法を採用している日本語教師は、身ぶり、現物提示、記号・図表・イラスト・写真・動画の使用などを心がけている。英語などの媒介言語を用いない直接法の教師は、「転ぶ」という動詞を教える際に自ら転んで見せるなど自分の身体さえも教材化して伝達手段として活用している。入門初級を教えている教師ほど実物教材(レリア: realia)を教室に持ち込んで、現物提示しながら授業を展開している。記号や図表を板書しながら説明し、テキストにあるイラストだけでなく、教師がとっさの略画を描いて場面や人間関係を提示することもある。

最近では、パワーポイントを用いて授業をしたり、学習者に発表させたりしている。その際も、パワーポイントのスライドに文字情報だけを示すのでは、学習者が寝てしまうので、わかりやすい図表やイラスト、写真などを取り込んで示すと興味を持って画面に集中するようになる。さらに動画やパワーポイントのアニメーションの効果を加えると興味・関心を持続させることができ、絵画的記憶として学習者の長期記憶に保存されることとなる。

パワーポイントを用いて、学習者に発表させてわかる異文化の差異もある。例えば、ある中国人の交換留学生は、自分の出身大学のキャンパス・ライフを紹介する中で、学生寮の部屋の写真を示して、二段ベッドの上の段に寝ていたことを「二階で寝ていました」と説明した。それは、よくよく聞いてみると日本語と中国語の助数詞の違いによることがわかった。建物の一階、二階、三階を中国語では「一楼、二楼、三楼」あるいは「一層、二層、三層」と表記する。また三段ベッドは、下から「第一層(下層: 底層)、第二層(中層)、第三層(上層: 頂層)」となる。そこで二段ベッド(二層床: 高低床: 上下鋪)の二段目に寝ていたのを「二階で寝ていました」と言えばいいと思ったようだ。中国語母語の干渉の例である。



ちなみに三段ベッドは、中国語で「三層床」であるが、中国人学習者は日本語の文脈で「三

階ベッド」といったり、結婚式などの三段のケーキも「三階ケーキ」と言ったりする。日本語教師としては、単に二段ベッドの場合は「二階ではなく、上の段あるいは二段目」と誤用訂正するだけでなく、学習者の文化的な背景をも理解する必要があるだろう。そういった姿勢で臨むことが「ユニバーサルなコミュニケーション」につながるのではないかと思われる。

谷村(2014)は、マインドマップの作り方を「好きなもの、好きなこと」というテーマで紹介している。左の図のように中心にテーマを提示し、その周りに枝を伸ばして、好きなもの、好きなことを書いていく。左の図であれば、TVの先がさらに枝分かれして、ニュース、歌番組、ドラマなどと枝を広げてよい。文字情報だけでなく、イラストでも記号でもよい。枝を色分けしてもよい。提唱者のトニー・ブザンは、マインドマップのためのパソコン用ソフトも開発している。(Buzan's アイ・マインドマップ iMindMap Ver.3 日本語版 Pro for Windows)



7-2. 伝達様式：情報を伝える順序、文章のレイアウトなど

情報を伝える順序として、日本式の「起⇒承⇒転⇒結」がわかりやすいとは限らない。まず、結論を先に出して、その理由を列挙・例示する方が、緊急時や細部がわからなくてもよい場合などには、外国人にはわかりやすい場合が多い。文章のレイアウトなども、見出しや小見出しを付けて、わかりやすくまとめる工夫が求められる。見出しや小見出しがあると本文の内容を推測しながら読み解くトップダウン処理(top-down processing)がしやすくなる。また、小見出しを頼りに必要箇所だけを拾い読みして、知りたい情報を探すスキヤニング(scanning)が可能となる。

逆に見出しや小見出しがないと言語知識を手がかりにして理解を進めるボトムアップ処理をしなければならず、記憶への負担が多くなる。拾い読みのスキヤニングもしにくくなる。

論文なども、メインタイトルだけでなく、サブタイトルをつけると内容の絞込みができるし、最初に要旨やキーワードを五つほど出しておく、本文を読まなくても書かれている内容が、自分に必要なものであるか否かの判断ができる。いわば論文における読者サービスとなる。

文章のレイアウトとしては、県の広報誌も市報も縦書きと横書きが混在していて、外国人には読みにくいいため横書きに統一するなどの策が考えられる。横書きと縦書きだとページの進行も逆になる。学術論文集も文学系・歴史系の縦書き論文とその他の分野の横書き論文が混在している場合がある。そのような場合、二重にページを表示するなど工夫が必要となる。どこに奥付を持つてくるかも問題となる。

7-3. 伝達内容：伝える情報の取捨選択

伝える情報を取捨選択しないと膨大な情報を届けても活用されないこととなる。論文集などに字数制限があるのも、内容を簡潔に表現し、必要な情報だけを伝えるための枠組みと言える。書籍に目次や索引を付けるのも、伝える側が受け取る側に対して、必要な情報の取捨選択をしやすくするための配慮であり、読者サービスであると言えるだろう。

学術論文などには「そして」「それで」などの接続詞は、不要である。

8. 病院関係情報と「やさしい日本語」

最後に、行政や教育だけでなく、病院や薬局などの医療関係の表示・表現も検討する必要があるだろう。



病院関係情報のうち薬関係の表示は、間違えると命に関わる場合もあり、配慮が必要となる。

例えば、山口市内のある総合病院での薬の袋には「のみぐすり」と平仮名で大きく表示されている。子どもでも読めていいのだが、薬を「のむ」と表現する言語と「たべる」と表現する言語があることを承知しておく必要がある。中国は「吃薬」で「たべる」であり、

英語の take a medicine も「たべる」側の表現である。

英語圏で「のみぐすり」というと液体の薬 (a liquid medicine) を思い浮かべるかもしれない。日本語圏では、「粉薬(powdered medicine)」であろうが、「丸薬(a pill)」であろうが、「煎じ薬 (a decoction; an infusion)」であろうが、「のみぐすり」となる。

薬の袋の注意書きには、「薬の飲み方(内服)」とあり、「お薬は用法どおり服用してください」と書かれている。以下、同じ面に6回「服用してください」という表現が使われている。また、「薬の保管」という項目では、「長時間たった薬は変質のおそれがありますので、のまないでください」と表記されている。つまり、同じ面に「飲む」「服用して」「のまないで」と三種類の表記が使われており、統一性がない。表の面には「お飲みください」とあるのに、裏面には「服用してください」とある。「飲んでください」では、患者に失礼に当たるのであろうか。

「くすり」1回、「薬」5回、「お薬」3回と一貫していない。日本語の表記法がはっきり定められていないとはいえ、平仮名書きだったり、漢字表記だったり、美化語の「お」をつけたり、つけなかったりと気まぐれな表現方法に外国人は戸惑うのではないと思われる。

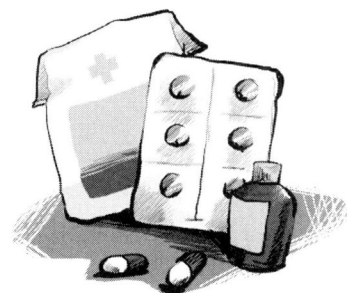
注意書きの最後に、「お薬についてわからない事がありましたら、すぐ薬剤部へお問い合わせください」とあるのは、親切な配慮だと思われる。ただ、薬の袋の中の「お薬の説明書」(A4版3枚)には、「～て下さい」の形が16回出てくるが、「～てください」の形は、わずか1回出現するだけである。

「～て下さい」は、すべて平仮名書きより一字分少なくなり、スペースを省くことはできるだろうが、教科書・問題集や新聞などの表記は、「～てください」の形が主流だと思われる。

「公用文における漢字使用等について」(平成22年11月30日の内閣訓令第1号)では、次のように「・・・てください(問題点を話してください)」の例を示している。本動詞には「下さい」、補助動詞には「～てください」と区別する考え方もあるが、あまり現実的とは言えない。

前述の山口県広報誌『ふれあいやまぐち』や『市報やまぐち』には、「ご注目ください」「お問い合わせください」「ご相談ください」「ご参加ください」「ご協力ください」などの表記が使われている。

以上、埼玉県が作成した「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」の内容に沿って実例を検討してきたが、山口県においても「外国人にやさしい日本語表現」について検討する必要がある



るだろう。行政関係者だけでなく学校関係者、特に外国人との接点の多い日本語ボランティアの皆さん、山口県の『おいでませ山口1～5』のシリーズ作成関係者の間での「外国人にやさしい日本語表現」について基本方針を検討する必要があるだろう。日本語テキストだけではなく、行政文章、窓口対応、看板・表示などについても見直していくことが今後の課題である。

[本文中のイラスト提供] ©中本千尋

【参考文献】

庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編(2013)『「やさしい日本語」は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために—』ココ出版

岩田一成(2014)「看護師国家試験と『やさしい日本語』」日本語教育学会『日本語教育』158号、pp. 36-48

埼玉県「外国人にやさしい日本語表現の手引 2006」

<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/tabunkakyousei/yasasiinihongo.html>

坂口安吾(1948)「敬語論」『文藝春秋』第26巻第7号

谷村諭思(2014)「マインドマップを用いた『偏愛マップ』作製の体験」山口県教育カウンセラー協会発行『エンカウンター研究』第7号、pp. 101-108

野田尚史(2014)『「やさしい日本語」から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—』日本語教育学会『日本語教育』158号、pp. 4-18

林伸一(1988)『「簡約日本語」批判』全国語学教育学会(JALT)『THE LANGUAGE TEACHER』6月号

林伸一(2007)「場の倫理と個の倫理—日本事情論としての考察—」山口大学文学会発行『文学会志』第57号、pp. 1-15

林伸一(2014)『「省略する言語文化」と『明示する言語文化』—暗黙知、明示知、『見える化』についての考察—』山口大学人文学部異文化交流研究施設発行『異文化研究』vol. 8、pp. 1-13

三上章(1970)『文法小論集』くろしお出版

光元聡江(2014)「取り出し授業と在籍学級の授業を結ぶ『教科書と共に使えるリライト教材』」日本語教育学会『日本語教育』158号、pp. 19-35

【参考教材】

山口県日本語教育ネットワーク「おいでませ山口」作成委員会発行(2010)『おいでませ山口1』

山口県日本語教育ネットワーク「おいでませ山口」作成委員会発行(2009)『おいでませ山口2』

山口県日本語教育ネットワーク「おいでませ山口」作成委員会発行(2013)『おいでませ山口3』

山口県日本語教育ネットワーク「おいでませ山口」作成委員会発行(2015)『おいでませ山口4』

山口県日本語教育ネットワーク「おいでませ山口」作成委員会発行(2011)『おいでませ山口5』

